すゝめのさうし

夫西方十万億土遠なゝまなし
さなり〱家もこゝろの弥陀乃国
ぜさ世ゝ般若乃縁起のあり月ゝ
取ゝ殊法の網ぞまもまする母
摂取不捨乃誓ゝ漏ゐ残るへぬ
独なをを仏の法の城戯ミせつく
ぞ深く悩不浄衣の代へぎ佛も

しらぬも心ひく雲ひのあかよ
海面ふや知人もしらぬ人なし
またをしめは国八川のわ渡舟
まりしるもや浜荒よりやく
笙歌遥よ聞ゆ孤雲乃うへ聖衆
来迎す落日前があらうとや
山月もあらし紫雲乃立つかうや

詞

のり渡者是佛乃教の中えな
極八ちやうも丹もとなく極西し
ざるもうかふちの苔しきや路
浪のよわが浦の浜浅乃場に
よりなしもや流ゆきせ三急
絲が乃錦の中ふけべ掛取渡見
思ふ紙だ荒船乃通路猶も流る

あわらかなしくかは
まくぜ愛をも寺まあるまじや
有無阿弥陀仏 口詞 〽いつは小梅も
毎月乃縁日に小備へ付てまいらず飛
ハヽら後ぞしの老ミ尽ん所ろり
おさと乃業をいく人の見付てあし
ぐれよ向ている了挑中ろうと皆人

爪寫｜あへ里が月見ましてさと
濃見をば業ら〽兎角思ひも
よらぬ侭のなまよのか一とそれそ
おかまふのるび所人なまいはひと
う海｜や所ぞもやうはさう
なのわもさめば上人おほ下向
びとへすー跡継乃東遠なまいは

下カヽリ
りこうを長生して氏孫の
時移よ何乃事まよう貴子浮衣
優曇花乃華待えう留心らして
花の要方ふさしず浮しひ乃涙
被ふ宮方随ぎ来え氏男那のこ
安楽国よむま随しのとぞ誰片衣
歓喜存なし取りし輪廻安執の
閻浮乃ぬをず没めて未落しを
手ぶ口惜うう後へとよ 上詞 実に
蔵乃中に理を極せ生ま那のこ
ひとつ乃蔵悔の廻心乃成曲し
呼こ木さとのなを知楽ん
上
被ハなのこうゑ计ゐまうしき
なりく展手息て那のわうん

ミテ詞
「さて〳〵只今なる人の名乃名乗れ
とへぢうる条ハてゐ御事ハ〳〵」

ワキ詞
「本より我の御名人あるなる事を
な老ハ我もじ所望なるは人を代
乃かへ申しをうるわてお残の名
ひへ」

ミテ
「昔長井斎藤別当
実盛ハ此篠原乃合戦ニ討まれぬ

ゆかりなりしまであらうらめ

ワキ
「さ承ハ平家の侍弓取てハ名将
其戦物語ハ無益なしおとめ
なき跡のわらへ」

「いやさ承ハ
しかれハ真実其時の有様を池水
にて鬢鬚を洗ひ神しとなわ
せしめ執心残りを尽かがぜ

此あたりの農人まても幻乃ことく
見申候と申候扨ハいか成人に
みえ候そ 太山木乃其梢とハ
見えさりし桜ハ花に顕れけり
むもれ木乃花咲事も無かりしに
不思議やさてハ實盛乃其在也
法談物語人乃上かと思ひしに

身乃上成のかしきとよ扨ハ
おことこそ實盛濃其亡霊にて
ましまし候か 我ハ實盛か幽霊
なるか魂ハ冥途にありなから
魄ハ此世に留まりて 猶執心の
閻浮乃世に 二百餘歳の程ハ
経れとも 浮ひもやらて篠原乃

シテ上カル　池のおもに浪もなく　ワキ上カル　更行
やうやう心乃闇乃　シテ　夢ともなく
ワキ　うつゝともなかなかに　シテ　思ひのなかみ
上歌　篠原の草葉乃霜乃翁さびしく
人那とかめそ假初よ現れ出る
實盛乃名越もらし給ふなよ
なき世語も恥かしとて御前を
立さりて行と見えしハ篠原乃
池乃ほとりにて姿ハ幻と成て失よ
けり〳〵　早上カル　いさゝや有時に篠原
まうさば遠里をとふらひ候と
上歌　篠原濃以遣乃邊の法の水〳〵
深くも頼む称名乃声はやうる
弔ば初夜より後夜に至る心も

西八行月乃光ニ於ていもかも
なもあみだ仏なりし人ハ極楽西
阿弥陀仏南無阿弥陀仏極楽
世界ニ住ぬまでも苦界を越
過て輪廻の故に論まぬ歓喜の
心いりまくらや所ぞ不退乃位
歓喜光量寿仏となる道もや

来こそうつくしる人ぞ来こ
さらとよ往生は有無といたさ
見る帰命阿弥陀如つは
又行此家至ても極楽へつー
引なさん往生をうへーとなるのと
香のさや不思議や那とて見
あひよる池乃西に迷ようのひ

よ所老在乃まへまたるにはゞ霞隠り
ずほちう我帯けるふしぎさよ
理木衰人しまゝ悪勇としまめし
ごろ沼の池乃いらひ深さゞ備羅孔
善悪乃数ゝをぞなへりへてたりしを
好ゝよ是非にまろあらわ
なる海ことゝ果かゞ負人ゝ思さゝふ

凡も世もなそゝ　たゞ上人のみ
眼ふ加々よ　凡廊や涙も露里裹
梅衣の　蛙眼ゝし　詠さゞ老武老
なき世　毛出立の宅やり雕数
よりいのひ珠母墨な帰　月乃光
特衰影　晴うしぬよ所衰錄衰
直裹なりしぐもつよよ闇ひの

錢き之筆作の太刀のさ那どの
男まていふ我らとても何に寶所
池乃尼の覺りう寶不用八巻我
実やうゝのはぬ清浪せし八思
持もきぬ金銀玄業おかをきは
かゝるをとり川てへ於西方へ
とう於一念弥陀仏即滅無量罪

西回向數心を澄ます事
なりまし時至て霞あひ渡なる
此浮を哀さんき浦臨乃物語
猶も哀思の悲て西に向ひ
篠原の草おは露と消え
有様語りし 梅も篠原乃
合戦破しの後は源氏濃のさに

手塚の太郎光盛ハわが木曽殿の
御まへに参りけるや光盛こそ
奇異の曲者とくみて討とつて
候へ大将かと見れハつゞく勢
もなし又侍かと思へハ錦乃
直垂を着名のれ〳〵とせむれとも
更に名乗らすなまりし聲ハ坂東

聲にて候と申木曽殿御覧じて
なり井が斎藤別當眞盛にてや
おなしく世ぞかし鬢鬚が白髪
になつて有へきに黒き給ぬらう不審也
なり樋口の次郎に見せよと
とて召されけれハ樋口参りたゞ
一目見てなみだをはら〳〵と

なのひてあ那むさんや那斎藤
別當にて候ひけるぞや真盛常に
申しゝは六十に餘つて軍をせ
ば若殿原とあらそひて先を
かけんもおとなげなし又老武者
とて人々に侮られんも口惜し
かるべしびんひげを墨にそめ

若やぎ討死すべきよし申しゝが
ひしが誠に染めて候洗はせて
御覧候へと申しもあへず首を持
御前を立ちてあたりなる此池
の波の岸に臨みて水の色もかはる
のけうなる柳の糸の枝たれて
氣霽ては風新柳乃髪をけづる

ごかわきえて是浪遙恙乃鬢鬚
洗て見れば墨は流れ落て本乃
白髪となりけり名を惜む
弓取ハ誰もかくこそ有べ
けれやさしやとて皆感
涙をながしけり　又真盛が
錦の直垂を着る事なりぬ

乃みならず真盛が都を出し時
宗盛公に申やう故郷へハ錦を
きよといふ本文那り
候まわ生国は越前の者にて
候ひしが近年御領に付て
武蔵乃長井に居住仕り候わ
る此度北国にまかり下候はば

りしぞかし討死仕候ひし其後乃

思出是迄也と頻に望

し赤地錦乃直垂を下

給はりぬ然古歌にもみち

葉を分つゝ行ハ錦着て家に

帰るこ人やみるらんと詠しも

此本文のこゝろなりされハ古の

朱買臣ハ錦の袂を会稽

山に翻し今の実盛ハ名を

北国の巷にあげ隠れなかりし

弓取乃名ハ末代に有明の月乃

夜すがら懺悔物語り申さん

上ロ半地

さてもやさる世を捨物ごとに心寝

水乃底さへよるゝ濁江乃こし新ふ

なよ竹の執心乃備後殿乃ちよ
めならしく見えし又家つりきうと
かゝ乃世とさく見しをさつめに
八くゑあ神し 女気なとよあまた
はらくく兵ら旅くいなびふ中
すかたしくせ 手塚乃太郎
光盛 云ふ出よさうくさし

弓の筈にかけて高々差上 押並て
なゝむ所を あつりまゝの袂
日本一の剛の者ころしむてうれ
よろこび 鞍なから よりなし後をて
翁の縁ゝ 倍捨てしかは 其後
手塚の太郎を 迎もかりなる母
まちかねて 掌握をたゝミ 安んして

二のさ陬さるゝところをむずと
くみて二ひきがあひだにどうと
おちけるが　老武者の悲しさは
いくさにはしつかれたりかぜのきに
ちゞめるこかれ木乃力もおれて
手塚が下になる所に郎等はおち
合てつゐに首をば掻おとされて

篠原の土と成て影もかたちも
なきあとの影も形も南無
阿弥陀仏とふらひてたび給へ
跡とふらひてたび給へ